



育ち盛りの国際感覚

—フェリス大特別講義への反応に見る日本の明るい未来—

横浜日独協会会長 早瀬 勇



7月の猛暑の昼下がり、フェリス女学院大学・緑園都市キャンパスで約20名の矢野ゼミ2年生に迎えられました。講義のテーマは「戦後ドイツ隆盛の背景を考える」(タウンニュース記事ご参照ください)。

お招き下さった矢野教授は、当協会の3月例会でご講演頂いたハンナ・アーレント研究の第1人者で、4月の「第1回日独ユースフォーラム横浜」には矢野ゼミの学生が参加しました。

教室ではQ&Aの時間がなかったのですが、その後、学生15名から送られてきたリスボン・シートを読んで、私は彼女らのしなやかな感受性と国際交流への意欲に感激し、明るい日本の未来を垣間見る思いでした。

その一部を以下にご紹介します。

・「敗戦国であったにもかかわらずドイツがEUの中心となっているのは何故か疑問に思っていたので、歴史的背景やドイツの民族性など丁寧に説明してくださいのおかげで理解することができてよかった。・・・横浜での日独交流はどのようなことをしているのか気になったのでまたお話を聞きたいです。」(YSさん)

・「ドイツは節約を政治目標にしているようですが、お金を使わない方が国の借金なくなるものなのですか？ 私のイメージだと国民がお金を使って様々なところにお金を行き渡らせるのが国の経済

が潤いそうという、本当ただのイメージなのですが、どうなんだろうと思いました。今は経済に詳しくないのですが、今回の話を聞いてもっと経済について知りたくなりました。

EUについても、自分はフランス語をとっているのですがフランスへの興味が強かったのですが、ドイツのことをもっと沢山知りたいと思いました。」(MFさん)

・「一番興味深かったのはドイツで留学中の体験談でした。寮に入っただけで、電話当番か皿洗い係りか選ばされた時に迷わず電話当番を選んだと聞いて、とても度胸と行動力に満ち溢れているなあと感じました。電話係りで失敗したにも関わらず、まかされた皿洗いの仕事を一生懸命にこなして皆に認められたこと。つまり望んだ仕事でなくても希望をもって真っすぐに仕事に向き合うことで、必ず良い結果となる、と教えて下さったことが一番心に残りました。

自ら行動することで、地域の文化も徐々に学ぶことができ、自らの経験値の向上につながれるということ学びました。」(RWさん)

・「留学する予定の私にとって、お話の一つ一つがとても為になりました。留学中に思い出すことがきつと何度もあるだろうと感じました。私も何かトラブルがあっても、何事にも熱心に努力したいと思います。」(SAさん)

・「どんな凄惨な人でも、必ず恥ずかしい経験をした上で、どんどん成長していくということを感じました。私もこれから様々な経験をして、人間的にも成長していきたいと思っています。まずは8月のドイツ短期研修で、恥ずかしいという気持ちを忘れて、自分から発言したり、行動していくことを近い目標として頑張りたいです。私たちが理解しやすいように楽しくおはなしして下さり、またいつかお話をききたいと思いました。」(AMさん)(了)

戸塚区版 / No.585 2016年(平成28年) 7月28日(木)号

上倉田町の早瀬さん
フェリス女学院大学で7月4日、横浜日独協会の早瀬勇会長(上倉田町在住)がゼミの学生らに向けた講話を行った。

フェリス大で講話

ドイツの文化など伝える



(写真右から)ゼミの矢野久美子教授、早瀬勇会長、同大の学生ら

盛の背景を考え、早瀬会長がドイツで過ごした経験や新著『ドイツの試練—難民、ギリシャ危機、脱原発—』などをとくにドイツの文化や政治の現状を話した。「ドイツの精神や、経済の発展から学べることも多いのでは」と学生らに語りかけた。

また、他国との風習の違いに戸惑った話などは、学生の笑いを誘っていた。

橋本 孝先生ご講演

『誠実に生きたグリム兄弟
—その闘いとその生き方をめぐって—』
を拝聴して

会員 佐野正純



ご講演をお聴きして、如何に自分が無知であるかということの思い知らされた1時間半であった、というのが偽らざる感想であります。

グリム童話は知っております。ブレーメンの音楽隊、その像の前で記念写真も撮りました。白雪姫、赤ずきんちゃん、ヘンゼルとグレーテル、シンデレラ、作品名もこの程度ですが思い浮かびます。しかしグリム童話の



何を知っているかと問われると、何も知らなかったのだと、本日、橋本先生のお話しを拝聴して知りました。帰宅して早速蔵書を探しましたが、

グリムの書は全然ありません。

童話を読む年齢時に、私は鳥取県の、ど田舎の野山を走り回っておりましたし、その後は支那事変、大東亜戦争と続き、子供も戦記ものに胸躍らせる時代に生きてきました。ドイツ語を始めた折の教科書もとってありますが、Goethe, Storm, Heine などで、グリムは全くありませんでした。

翌日、町に出る機会がありましたので、有隣堂に寄りました。「グリムの森へ」という文庫本が目についたのでひとまず求め、帰りの車中で早速読み始めたのですが、この本にも橋本先生がエッセイと解説を寄せておられます。

再び先生の該博なご知識に敬服致したのですが、中でもグリムが高田屋嘉兵衛に大変に関心を持ち一文も記していた、というくだりには非常に驚かされました。政治家であったグリム～と先生のお話しで初めて知りました～の関心のありようなのだと思いました。いずれにせよ、グリム兄弟の出自、とりまく激動の時代背景、学者としての卓抜した存在等々、非常に内容の濃いご講話を堪能させていただきました。

きました。有難うございました。

最後に新人の私、前回のモーツァルトのお話しと今回で2度のご講話を拝聴したわけですが、この会＝日独協会は何と碩学の方々が揃っているのだろう、という驚きと感銘を強く受けた次第でございます。これから先も新しい知識と驚きに満たされるであろうと、期待と楽しみ一杯でございます。

<自己紹介>

とある春の宵、とあるタンゴミロンガのコンサート会場で一人の紳士とご挨拶、そのお話しの中に「横浜日独協会」(以下 JDGY) の名が出て、私、日独協会は勿論存じておりましたが、横浜にも協会が有るとは。その紳士のお名前は鶴岡忠成氏。全く偶然の成り行きで JDGY をご紹介戴きました。

私、昭和4年(1929)生まれ。もうすぐ87歳になりますが、ドイツ狂いでは人後に落ちません。皆様といい勝負。東京大森に独逸学園があった頃、併設の夜学ゲーテに通い、32才の時(1962)には独語通訳案内業の免許をゲットしました。中年になっても当時渋谷にあったドイツ語塾 Rhein で、若い仲間と学んだり飲んだり旅したり・・・その塾で教えを戴いたユードック先生のお名前を JDGY 理事の中に発見致しました!

仕事上での顧客往訪に幾度か訪独もし、また年次休暇を使つての海外旅行はすべてドイツ行と決め、Brieffreund (ペンフレンド) の案内で旅三昧。

このようにドイツ・ドイツの生涯でしたが、どうしてもドイツに住みたいの思いが募り、67歳の時父が他界したのを機に、勤めを辞し単身南独フライブルクに移り住んでしまいました。実は私還暦を機に絵を始めそちらも夢中だったので一現在日本美術家連盟会員一スケッチ帳を手に、北から南まで行き当りばつたりの一人さすらいはえも言われぬ味わい—もういつ死んでもいいと思ったものです。されど、好事魔多しとの譬えの通り、1年半程で前立腺癌と分つて帰国手術の成り行きとなり、夢の生活は呆気なく終了したのでした。

このたびは、本当に思いもよらず素晴らしい会に入らせて戴きました。老齡故何の貢献も出来ぬのにと、申訳なく存じておりますが、せめて3年くらいはお仲間に入れて下さり、楽しい老々後を過ごさせて戴きたいとお願い申し上げる次第です。ご紹介下さいました鶴岡様、快く受け入れて下さいました早瀬会長、能登事務局長はじめ会の皆様には感謝致しつつ、自己紹介とさせていただきます。



『志賀ト二オ氏を囲む歌う会』

に参加して



会員 菊川瑛子

特別企画『ト二オ氏を囲む歌う会』は、本格的な発声練習からはじまり、ト二オ氏は、その懇切丁寧、



且つ熱心な歌唱指導で参加者の心を豊かにしてくれました。ポイントは、歌曲はその曲の調（へ調やト調など）から歌の

表情を読み取り、そのうえでメロディーをシンプルに歌詞に当て、心をこめて歌ってゆくということでした。一曲目は三木露風作詞、山田耕筰作曲の変ホ長調「赤とんぼ」― 先ず皆が思い出しながら何となく歌いました。それに対しト二オ氏は、1番はく夕焼け小焼けの赤とんぼ―>シンプルにメロディーを歌い、2番はく山の畑の桑の実を―>レントで感傷的に、3番はく十五でねえやは嫁に行き―>重要な歌詞なので、時間をかけて悲しげにしつとりと、4番はく夕焼け小焼けの赤とんぼ―>情景を素直に歌いましょう、というコメントでした。



またb（フラット）が多くなると音が柔らかくなるとも言われました。すると皆が歌う「赤とんぼ」がガラッと変わり、しつとりと素晴らしい演奏となりました。

二曲目は、近藤朔風訳詞、ウェルナー作曲の「野ばら」(Heidenroeslein)です。田園的、牧歌的性格を持つへ長調です。6/8拍子で、少し動きが出ますとの説明があり、ト二オ氏のご母堂のドイツ語原語朗読を拝聴した後、皆で拍子に合わせてドイツ語で何回か読んでみました。1番の情景はシンプルに、2番は想いを込めて訴えかけ、3番はテンポを速めて力強く、との指示がありました。日本語訳の「野中のばら」とドイツ語の Heidenroeslein は歌詞から受ける気持が全く違うことに驚きました。学んで、そして歌った満ち足りた特別企画でした。ト二オさん有難うございます(了)



気が付けば息子がウーン少年合団に(5)



会員 鈴木 優・弘美

二度目の夏合宿前に、重大な決断をしました。団を辞めて日本に帰る事です。日本での学校になじめなくなる心配や、学習内容があまりにも違うからです。声変わりする前にボーイソプラノとして日本でも活動すること等、いろいろな思いから退団帰国を決断しました。帰国して一か月のんびりと自宅で過ごしました、その時はなんと家の都合で引っ越して中学生らしく過ごせるよう個室が当てられましたが、考えて見るとなんとママと一緒に過ごしていたようです。

ところが滉一の帰国を知った友人や知人が歌って下さいとの依頼が多数舞い込みました。そこで滉一の別の才能を発見することが出来ました、ポピュラーが上手なんです。なんとラテンバンドで歌って大好評。何度も出演依頼を受けました。

そんな中、合唱団のドイツツアーの時期が近づきました。我儘な滉一君はドイツツアーに行きたいと言いつつ出しました、団にメールしてみました。ダメ元という気持ちです。なんと！是非参加して下さいとの返事。滉一が所属するハイドンコアのカペルマイスター「ジミー・チャン」は手を打って大喜びしていたとの情報まで入って来ました。しかも、あのウーンフィルニューイヤーコンサートに出演してほしいとのオファーまでもりました。世界中に同時放送。合唱団でも選りすぐりのメンバーで出演します。しかし冬休みで寮はクローズ、子供一人でホテルにもいられません。

そんな時、団で親友になったフローリアンのお母さまに打診してみたところ家で預かってくれると言ってくれたのです。またラッキー!! 再度ウーンに - - -。でもその時パリでテロがありヨーロッパ全体が大変な事になってしまいました。

ドイツツアーの安全や、ニューイヤーコンサートがつつがなく行われる事、出演したいメンバーが他に大勢いる中、一時出戻りの滉一が無事出演できるのか心配の種は山ほどーここは本気で祈るほかはありません。本当に良かった、テロにも合わずニューイヤーコンサートも無事に終え、1月2日親友フローリアンのご家族にウーン国際空港まで送っていただき、1月3日無事日本に帰って来ました。

本当に感謝、人生最高の感謝。心より祈ったり感謝することの経験をさせていただきました。(了)

戦争と音楽をめぐる秘話

～リリー・マルレーン～

会員 河野 健

はじめに 昨年は戦後 70 年の節目を迎え、何かと話題の多い年だった。戦争をめぐる話は、各人それぞれに感慨一入であり、知られざる話も無数にあると思われる。以下の話は知る人ぞ知る、必ずしも秘話とは言えないかも知れないが、戦争によって引き起こされた悲劇が音楽によって救われた逸話として、未長く、広く後世に伝えられて然るべきだと考えられるので、その経緯をここに改めて記しておきたい。

「リリー・マルレーン」をご存知だろうか？ マレーネ・ディートリヒは？ 「リリー・マルレーン」は 1915 年、第一次世界大戦で東部戦線に従軍したドイツ人ハンス・ライプが作詞し、1938 年に同じドイツ人のノルベルト・シュルツェが作曲、1939 年、最初にララ・アンデルセンが歌ったが、レコードの売れ行きはさっぱりだった。ところが、第二次世界大戦が始まり、ドイツが占領したベオグラードからドイツ放送がこの歌を流すと、ドイツ兵士に熱狂的に歓迎され、瞬く間に彼らの愛唱歌となった。そして、この放送を聞いた連合国側の兵士の心もとらえ、彼らにも歌われた。

マレーネ・ディートリヒは 1902 年生まれ、1920 年代のドイツ映画全盛時代に女優として活躍し、1930 年代にはアメリカに渡り、ハリウッド映画にも出演し、歌手としても活動した。反戦思想の持ち主で、ヒトラーの帰国要請にも応じず、アメリカの市民権を獲得して定住した。1944 年にディートリヒが「リリー・マルレーン」を歌って大ヒット、ディートリヒが慰問に訪れた各地でこの歌を歌ったので、敵味方を問わず戦線の兵士たちによって盛んに歌われるようになった。



マレーネ・ディートリヒ

1970 年 3 月～9 月に大阪で開催された万博にディートリヒが来場、九月八日のコンサートで「リリー・マルレーン」を歌い、往年のディートリヒを知っているオールド・ファンが詰めかけ、大反響を呼んだ。この歌は日本人を魅了し、梓みちよ、加藤登紀子などによって歌われ、一躍有名になった。

しかしこの歌は、太平洋戦争中に日本で過ごさざるを得なかったドイツ兵士によって、既に日本で歌われていたのである。

1942 年 11 月 30 日、横浜港に係留されていたドイツの輸送船ウッカーマルク号が突然大爆発を起こし、日本船一隻を含む計四隻の艦船が炎上した。この事故の詳細は、軍事機密に触れるとして報道されなかった。この事故でドイツ兵 61 名、中国人 36 名、日本人 5 名、計 102 名の尊い命が奪われた。遺体は久保山斎場で茶毘に付された後、日本人の遺骨は遺族に引き渡され、

中国人の遺骨は、南京墓地と呼ばれた地藏王廟の安骨堂に暫く保管された後、中国へ持ち帰られた。ドイツ兵の遺骨は、身元が特定されなかった 16 名分が根岸外国人墓地に埋葬され、身元の判明した 45 名分はドイツ領事館で保管した。遺骨の一部は 1947 年二月にドイツへ持ち帰られ、残りの遺骨は 1947 年六月、山手の外国人墓地に、第二次世界大戦中、日本およびその周辺で亡くなったドイツ兵を悼んで記念碑が建てられた際に、そこに納められた。

事故に遭遇したが辛うじて一命を取り留めたドイツ兵 100 余名は、横浜市内の各所に分散して帰国の船を待ったが、来日した戦艦が横浜港へは寄らず神戸に入港したため乗船できなかった。ドイツ本国は帰国のための船を派遣する余裕がなく、もしあったとしても、インド洋を通り喜望峰を回って無事帰国できる可能性は殆どなく、ドイツ兵は日本に留まらざるを得なくなった。

ドイツ兵は帰国まで箱根に滞在することになり、1943 年四月 23 日、横浜を発って芦之湯・松坂屋旅館に到着した。翌日からドイツ兵は規則正しい共同生活を開始した。彼らは日本海軍から客としての待遇を受け、食糧を支給されていたので、食べ物に不自由はしなかったが、彼らにとって最も重要な故郷の味である主食の黒パンが不足していた。原料は自前のものがあったが、パン焼きかまどがない。やっと小田原に理想のパン焼きかまどを発見して歓声を上げた。それから小田原へパンを焼きに行き、相模湾で泳ぐという楽しみが増えた。

ドイツ兵は地元の人たちの親切に支えられ、1944 年秋からは、学童疎開で神奈川県各地からやってきた子供たちとの交流も深め、無聊な日々を耐え忍んだ。彼らはいづれ帰国できるかも知れないまま、結局 1947 年二月まで四年近くを箱根で過ごした。

彼らの楽しみの一つに音楽があった。何かといえば三々五々集まって歌を歌った。それは日本人を魅了する見事な男声合唱だった。そして彼らも、戦場の兵士たちの間で流行っていた「リリー・マルレーン」を好んで歌った。この歌を歌うことによって、彼らは故郷に残してきた恋人たちや母や妻を偲ぶのだった。その哀愁に満ちた歌声に、箱根の人たちも心を通わせ、一体感が深まった。こうして、箱根の人たちと学童疎開の子供たちは「リリー・マルレーン」を日本人として最も早く知ったのである。

松坂屋旅館には大学生の息子、松坂進がいた。進は大学でドイツ語を学んでいたため、積極的にドイツ兵と交わり、すぐに親しくなって、彼らの相談役となった。1944 年の暮れに、その進が招集されて軍隊に入隊することになった。ドイツ兵は口々に「死ぬんじゃないよ！」「生きて帰れよ！」と叫んで別れを惜しんだ。そして、誰からともなく「リリー・マルレーン」の歌を歌い出した。終戦により、進は無事、箱根に帰ることができた。ドイツ兵たちは大喜びをした。

1945 年 5 月 7 日、ドイツは無条件降伏をしたが、彼らの態度は些かも変わることなく、規則正しい生活を続けた。8 月 15 日には日本が敗戦を迎え、連合軍が進駐してきた。箱根にも米軍 MP が現れ、ドイツ兵は

武装解除を要求された。彼らはこれに応じ、ここにいる事情を説明したので、松坂屋旅館の占領は無事に終了した。

しかし、帰国命令はなかなか出なかった。さすがのドイツ兵たちも規律を失いかけていた。そんな時に、不幸な事故が起こったのである。1945年10月10日、三人のドイツ兵が小田原まで出掛け、メチルアルコールを入手した。この危険な飲料を、彼らは帰国できない苛立ちを紛らわせるために飲み、三人のうち一人、ツェーレル・テーオが帰国を待たずに亡くなった。ドイツ兵は、これ以上犠牲者を出さないようにと気持ちを引き締め、全員が協力して帰国までの残りの日々を頑張りとおした。

1947年、やっと帰国命令が出て、2月23日に出発することが決まった。ドイツ兵は仲間の一人であったテーオの墓に詣で、一緒に帰れなかった無念さに涙を流した。

帰国の前夜、松坂屋旅館ではさよならパーティが開かれた。帰国するドイツ兵は箱根の人たちとの別れにあたって、感謝の気持ちを込めて「リリー・マルレーン」を歌った。これが最後の歌だった。翌朝、ドイツ兵は遂に箱根を降り、横須賀港に集められた他のドイツ人たちと共に、アメリカ軍が提供した貨客船に乗せられ、帰国の途についた。

その後、帰国したドイツ兵は戦友会「日本クルー」を結成し、親睦会を続けていた。松坂進は元ドイツ兵士の数人と文通を続け、かつての絆を絶やさなかった。進は「日本クルー」のメンバーに招待され、1990年秋に初めてドイツを訪れた。「日本クルー」の歓迎パーティではあの懐かしい「リリー・マルレーン」の歌が流れた。

1991年は横浜港での爆発事件から49年目、犠牲者の50回忌に当たっていた。その年の9月24日、ルフトハンザ航空機が成田空港に到着した。到着口から出てきたのは、三人の女性を含む11人の年配ドイツ人一行だった。それは松崎進のドイツ訪問の返礼を兼ねて実現した「日本クルー」のメンバーによる44年ぶりの日本再訪だった。彼らは観光旅行には目もくれず、思い出深い箱根の地で大半の時を過ごした。四隻の艦船が爆発した横浜港の現場を訪れ、かつての仲間が葬られている根岸および山手の外国人墓地を参拝した。箱根で一人眠っているテーオの墓の前では感慨無量であった。彼らが苦心して作った阿字ヶ池もそのまま残っていた。その池をめぐりながら、彼らの口から流れ出たのは「リリー・マルレーン」の歌だった。こうして10月3日、彼らは10日の日本滞在を終え、帰国の途についた。後日談はまだ続くが、ここでは省略する。

(注：雑誌「あとらす」34号に発表したものを一部改編して掲載)

主な参考資料

鈴木明「リリー・マルレーンを聴いたことがありますか」

石川美邦「横浜港ドイツ軍艦燃ゆ」
新井恵美子「帰れなかったドイツ兵」



リサイタル直前メッセージ



厳しい暑さが続いていると思いますが、皆さんお元気でお過ごしでしょうか。私は今、ニースにて恩師ガリツキー先生の講習会マスタークラスに参加しております。今日は選抜講習生の修了コンサートで演奏して参りました。予てからお知らせいたしましたリサイタルは、来月9月11日(日)14時より、東京文化会館小ホールにおいて開催いたしますが、今回の講習会では特にリサイタルの曲を重点的にレッスンを受け、本番に向けて鋭意準備を進めております。当日、ピアニストには、ドイツにて知り合い、現在素晴らしい演奏活動をなさっている富永愛子さんをお迎えし、19世紀後半から20世紀前半までの名曲を演奏させていただきます。

ドイツに留学して早くも4年半が経とうとしています。紆余曲折はありましたが、「もっと上達したい、もっとこの素晴らしい曲を理解したい」という一心で勉強を続けて参りました。未熟者ですが、今回のリサイタルはその自分自身の大きな区切りでもあります。

この度、サポーターズ倶楽部会員の皆様や在日ドイツ大使館ならびに横浜日独協会のご尽力により、今回のリサイタルへご来場いただける方が徐々に増えていると伺って、感謝申し上げますとともに身が引き締まる思いです。皆様にお会いできるのを楽しみにしております！

残暑が続くと思いますがくれぐれもご自愛下さい

2016年8月14日 南仏ニースにて 武田 章寛



選抜講習生の修了コンサート

◆武田章寛青年会員(ヴァイオリン)リサイタル

- ・日時：9月11日(土)14:00
- ・会場：東京文化会館小ホール ¥3000- (自由席)
- ・内容：R. シュトラウス、ドビュッシー、イザイ他
- ・後援：ドイツ大使館、JDGY

チケットご希望の連絡は事務局(能登)宛てでも結構です。

第1回 ドイツ・インダストリー4.0」セミナー 開催

主催：(公財) 横浜企業経営支援財団 (IDEC)
共催：横浜日独協会

「なぜ今 IoT・インダストリー4.0 か」(仮題)
ードイツ発 第4次産業革命への潮流を学ぶー

日時 2016年10月5日(水)
セミナー 14:00~17:00 質疑応答 17:00~17:20
会場：横浜情報文化ホール(情文センター内)
みなとみらい線「日本大通り」3番出口直結
横浜地下鉄・JR「関内駅」徒歩10分

講師

- ① Dr. C. Geltinger バイエレン州駐日代表部代表
工博 持田侑宏 同代表部顧問
「ドイツにおける状況と中小企業への適用策」
- ② 工博 佐藤声喜 (株)KMC 代表取締役
- ③ Mr. Andre Mahl FA サービス(株)
(Trumpf グループメンバー)

会員各位の参加歓迎(入場無料)参加希望者は
下記事務局まで申込んで下さい。登録しておきます

注:「IoT=Internet of Things: あらゆるモノにインターネット」

ゲーテ横浜校が、JDGY会員に 6ヶ月間の特別コースを開講します。

毎月2回の12回コースで、授業料は1回が¥1000-、
合計¥12,000/6か月と言う画期的な条件でドイツ語
を初歩から学ぶことが出来ます。ご興味のある方はど
うぞ奮ってご参加ください。

コース：楽しみながらドイツ語
時間：2016年10月~2017年3月 第2・第3火曜日開講
10:30 - 12:00(2時限/週)
レベル：A2.1 以上
受講料：12,000円(12-20人)
講師：未定

お申し込みは事務局(能登)宛て 9月20日迄にメー
ルまたは電話にてご連絡下さい。
なお、既にお申込み戴いている方は、改めてご連絡の
必要はありません。

横浜日独協会会報 発行2016.9.1(第34号)
事務局：〒223-0058 横浜市港北区新吉田東2-2-1-913
能登 崇方
Tel & Fax: 045-546-0801, e-Mail: tak_noto@yahoo.co.jp
会報編集責任者：山口 利由子
e-Mail: jrr3@mvj.biglobe.ne.jp
横浜日独協会ホームページ
<http://jdgy.sub.jp>

行事予定



- オクトーバーフェスト：
・日時：9月17日(土)午後4時~7時(予定)
・会場：横浜カントリーアンドアスレティッククラブ
Tel.: 623-8121- 根岸線山手駅より徒歩15分
・会費：未定(昨年度は¥2000-ビール、鶏肉、パン付)
- 平成28年9月 例会：
・日時：9月18日(日)午後3:00~5:00
・会場：戸塚区民文化センター4階 創作室
・内容：講演 CD鑑賞；坂井啓治会員
『罪のない人々の苦しみ』
・会費：例会-1000円 懇親会-500円
- 平成28年10月 例会：
・日時：10月15日(土)午後3:00~5:00
・会場：戸塚区民文化センター4階 創作室
・内容：講演/実演；吉田真里子会員
ドイツ社交ダンス教師/トレーナー/審査員資格
“Tanzen wir zusammen!”(Shall we dance!)
ーウインナーワルツの世界はー
・会費：例会-1000円 懇親会 500円
- 平成28年11月 例会：
・日時：11月27日(日)午後3:00~5:00
・会場：戸塚区民文化センター3階 多目的スペース(中)
・内容：講演；山口利由子 会員
食育指導士、フード・コーディネーター
『健康になるための食事・日本と世界事情』
・会費：例会-1000円 懇親会-500円
(自然食の試食)



新入会員：

- ・ザイデル千咲子様(ざいでる ちさこ)
- ・三木田 啓一様(みきた けいいち)
- ・梅村 大輔様(うめむら だいすけ)(青年会員)
- ・下村 幹夫様(しもむら みさお)
- ・木山 悠子様(きやま ゆうこ)(YC会員)
- ・長谷川 琢磨様(はせがわ たくま)

新刊紹介



ドイツ語で楽しむ日本昔ばなし《CD付》
著者 小山田 裕子 ¥1800 IBCパブリッシング
日本の代表的な昔話5編がやさしく読みや
すいドイツ語で書かれている。頭の中にド
イツ語回路をつくらう。



中級ドイツ語会話ハンドブック《CD付》
著者 谷澤優子、他 ¥2700 白水社刊
ドイツ語にも会話のパターンがある。この
様々な《型》を実例と合わせて解説。定型
表現ほか、ドイツ語で日本を語る 238 の表
現例付。

法人会員

株式会社文芸社 ウィンクレル株式会社 ボッシュ株式会社 トルンプ株式会社
株式会社テレビ神奈川
公益財団法人登戸学寮 株式会社コトブキ オーケストラ Afia 神奈川大学